

喪失、そしてそれに繋がるもの

地球上の砂時計の砂がすべてこぼれ落ちる冬のただなか、現世の果て。

なすすべもないまま母の肉体は見知らぬ夜の中へと溶けだしていった。

永遠のまどろみに抱かれるように、途切れた声はほころんだ花の中へと消えていく。

そうして焼け残った白い骨だけが恥らうように目の前に残された。

かつて母の体のなかに存在していた骨。

複雑に絡んだ内臓が、

ほとばしる情念と仄暗い刹那がこの美しい骨をみごとなまでにすつぽりと覆い隠していた。

西の他界に想いをはせ、細い指でかすれた記憶を拾い集めると

彼岸の汀からまろびでた魂は百億、千億もの光彩に包まれ

やがてゆるやかな曲線を描き出し、息をひそめ夜毎夢のなかに訪れる。